



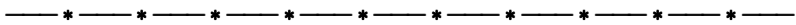
**Data**

監督・脚本：梁英姫 (ヤン・ヨンヒ)  
 出演：安藤サクラ/井浦新/ヤン・イクチュン/京野ことみ/大森立嗣/村上淳/省吾/諏訪太郎/宮崎美子/津嘉山正種

## 👁️👁️ みどころ

『ディア・ピョンヤン』（05年）で在日本朝鮮人総聯合会（朝鮮総聯）から北朝鮮への入国を禁じられた梁英姫（ヤン・ヨンヒ）監督が、見事なフィクションで「かぞくの思い」を表現！手術のため3カ月の滞在を許されたはずの兄に、なぜ7日間だけで帰国命令が？監視員に対して「あなたも、あなたの国も大嫌い」と言い放った妹の思いとは？さらに25年ぶりに再会を果たしたオモコとアボジのやるせなさとは・・・？

『シェーン』（53年）にも匹敵する「別れのシーン」が必見なら、小道具のキャリアバッグの意味は？こんな映画こそ、今のニッポンの若者必見！



## ■□ドキュメンタリーの梁英姫監督がフィクションに挑戦！■□

父親は朝鮮総聯の幹部、自分自身も朝鮮籍の「大阪のおばちゃん」にして、ニュースクール大学大学院修士号を持つ才女、梁英姫（ヤン・ヨンヒ）とはじめて親しく語り合ったのは2006年9月29日のこと。同年8月25日に『ディア・ピョンヤン』（05年）（『シネマルーム12』392頁参照）の試写を観た後、ひょんな縁で9月29日に居酒屋「風まかせ 人まかせ」で開かれた「ヤン・ヨンヒを囲む会」に妻と共に出席した私は、数人の個性的なメンバーたちと『ディア・ピョンヤン』について、南北問題について、映画づくりについていろいろと語り合った。『ディア・ピョンヤン』に続く『愛しきソナ』（09年）を見逃したのは痛恨の極みだったが、それまでドキュメンタリー映画ばかり撮っていた彼女がはじめてフィクション（とはいっても、自らの体験にもとづいたもの）に挑戦した本作が、2012年第62回ベルリン国際映画祭C. I. C. A. E（国際アートシスター連盟）賞を受賞したと聞いては、こりゃ必見！

## ■□■ストーリーの軸は？前提知識は？■□■

島国ニッポン人はニッポン国のことは知っていても、1つ海を渡った隣の国の事情や出入国のためのビザ取得の要件等についてはトンと知らない人が多い。本作のストーリーは、帰国事業で25年前に北朝鮮に渡ったソンホ（井浦新）が脳腫瘍の手術のために日本への3カ月間の「帰国」が許されたことに喜び、ソンホの到着を心待ちにしている妹のリエ（安藤サクラ）、アボジ（津嘉山正種）、オモニ（宮崎美子）、そして叔父のテジョ（諏訪太朗）たちの姿から始まるが、それってどういうこと？また、ソンホにはピッタリとソンホを監視する役割のヤン同志（ヤン・イクチュン）が同行しているが、これってどういうこと？さらに、リエが日本の友人に語るところによれば、朝鮮籍を持っているリエは韓国に入れないそうだが、それはなぜ？ヤン・ヨンヒ監督にとっては当たり前のことでも、本作をしつかり「楽しむ」ためには、そんないくつかの前提事実をキッチリ理解する必要がある。

他方、現在日本では何も決められない民主主義が大問題になっているが、かの国では「決定」がすべてだから、3カ月の滞在期間とされていたにもかかわらず、本国からヤン同志にかかってきた1本の電話によって突然、明日帰らなければならないことになるから恐い。本作は最終的に『かぞくのくに』というタイトルにされたが、当初の仮題は『7 days』だった。『かぞくのくに』もいいが、『7 days』も本作の本質にピッタリのタイトルだと思ったが・・・。

## ■□■この理想的キャストの実現は良き脚本から！■□■

本作はシネコンで上映されるような大作ではなく、低予算でつくられ最初から単館上映を予定している映画。したがって、ギャラの高い有名な俳優を集めるのは難しいはずだが、本作には安藤サクラ、井浦新をはじめ理想的な俳優が結集している。とりわけ、お世辞も美人とは言えない（失礼！）安藤サクラは、等身大そのままの姿でヤン・ヨンヒ監督自身が



(C) 2011 『かぞくのくに』製作委員会

持っていたはずの喜びや悲しみを見事に表現している。アボジが同胞協会本部の副委員長をしているからといって、娘のリエも金日成や金正日を「将軍サマ」として尊敬しているかといえば、必ずしもそうではないことはニッポン国の豊かさや自由度を少し考えれば明らかで、近い将来リエもきっと日本への帰化を考えるだろう。また、アボジと違い叔父のテジョは、今や資本主義国ニッポンが大好きになっているが、そんなこんなの「一族」を事実上まとめているのはオモニ。喫茶店の経営で家計を支えながら、悲しみはじつと胸に秘めいつも前向きに生きているオモニの姿には頭が下がる。

他方、『11・25自決の日 三島由紀夫と若者たち』（12年）への出演を契機として「ARATA」から本名に変えた井浦新は今や若手の個性派俳優として引っぱりだこだが、

難しい役柄に挑戦した本作でも抑制した渋い演技が光っている。また、監視員のヤン同志や、25年ぶりにソンホを迎える同級生のジュノ（村上淳）やチョリ（省吾）、さらにかつて互いに想いを寄せ合っていたガールフレンドのスニ（京野ことみ）もそれぞれ良い味を出している。これらのキャストがすべて第1候補で埋まったというのは、ある意味奇跡。しかしそういう奇跡が実現したのは、一にも二にも監督が書いた脚本がすばらしかったためだ。『ディア・ピョンヤン』も良かったが、私はドキュメンタリーよりはフィクションの方がより脚本書きや監督の能力が発揮できると考えているので、ヤン・ヨンヒ監督には今後も良い脚本によって良い俳優を集め、名作をつくってもらいたいものだ。

## ■□■このセリフの「重み」をしっかりと！■□■

反日教育を受け中国に住んでいる中国の若者たちはホントに日本が嫌いかもしれないが、それでも日本のアニメは大好き。まして、日本に留学し日本で生活している中国人はおおむね日本が大好きだ。だって、これだけ平和で安全そして誰もが親切にしてくれる国なんて世界広しといえども他にはないはずだから。しかし、リエは当然「かの国」よりも日本の方が大好き。もっとも、アボジは今なおそんな祖国のための活動をしているから、リエの気持ちが複雑なものも当然だ。

そんな中、しつこくソンホの監視をしているヤン同志の姿が目につくことにイライラしたリエが、「あなたも、あなたの国も大嫌い」と怒りをぶちまけるセリフが登場する。これはすごいセリフで、プレスシートのヤン・ヨンヒ監督の「ベルリン国際映画祭フォーラム部門公式上映 ワールド・プレミア終映後」には、「あのセリフをオフィシャルに言う為に40年もかかったような気がします。簡単なことではありません。北朝鮮に家族がいるという状況の中でいつも自分の言うことに慎重でなければならぬのが私たちですから」と書かれている。そりゃそうだろう。『ディア・ピョンヤン』発表後、謝罪文を書けとか映画づくりをやめろ等と言われたうえ、在日本朝鮮人総聯合会（朝鮮総聯）から北朝鮮への入国を禁止されたヤン・ヨンヒ監督が本作でリエにこんなセリフをしゃべらせるのは大変な覚悟がいるはずだ。わがニッポン国では総理大臣のことをボロクソに言っても何のお咎めもないが、かの国では・・・？自由と民主主義を満喫できるのはありがたいことだが、それが抑圧された場合と対比して、自由と民主主義を守るのも国民自身だということをしつかり考える必要がある。そのためには、このセリフの「重み」をしっかりと！

## ■□■この「別れのシーン」は名シーンとして後々まで・・・■□■

アメリカ西部劇の名作『シェーン』（53年）では何と言っても大きな余韻を残すラストの「別れのシーン」が有名だが、どんな映画でも「別れのシーン」には気を遣うもの。本作では、日本で生まれ育った若い女の子らしく抑えようとしてもどうしても感情が表に出てしまうリエに対して、あくまでも感情を抑制したソンホの姿が目につく。それは監視員のヤン同志も同じで、リエから「あなたも、あなたの国も大嫌い」と言われたヤン同志がリエに対して静かに返す言葉は「あなたが嫌いなあの国で、お兄さんも私も生きています。死ぬまで生きるんです」というものだ。北朝鮮への忠誠を誓うアボジでさえ、3カ

月の滞在予定をさらに延期してもらおうと考えていた矢先に「明日帰国せよ」との決定が下ったと聞いて、怒りに身を震わせたが、当のソノホは「この国ではこういうことはよくあるんだ」と少なくとも外面上は平静さを保っているからすごい。お土産に持って帰ると約束したサッカーボールを買うため、1人まちに出かけたソノホができる精一杯の楽しみは、かつての恋人スニと会うことだけだった。

しかして、今日は別れの日。オモニからプレゼントされた背広を身につけたヤン同志と共にソノホは静かに車に乗り込んだが、ここでスナリ別れられないのがリエ。そこでリエが示した行動とは？それはあなた自身の目で確認してもらいたいが、このシーンはヤン・ヨンヒ監督が安藤サクラに「何かアクションで反抗してほしい」と言っていたものがアドリブとして実現したものらしい。ヤン・ヨンヒ監督自身が「あのシーンは・・・現場の誰もが今もどうあのシーンが『起こってしまった』のかわからないと言います。本当に『起こってしまった』のです」と語るこの別れのシーンは、『シェーン』の名シーンと同じように後々まで「別れの名シーン」として語り継がれるのでは・・・。

## ■□このラストシーンが意味するものは？■□

ひと昔前の弁護士は重い革の書類カバンを片手に提げて法廷へ、というイメージだったが、最近はそのでもなくなった。現に私も、東レのエクセーヌという人工皮革でつくられた色違いの3つの書類カバンを約20年間使っていたが、1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災以降リュックが活用され始めると、私もその便利さに目覚めてリュックに宗旨替えした。しかし、大きな事件になると大量の記録は書類カバンやリュックには入らないし、遠くの裁判所へ行くときや1泊の出張の時は適度な大きさのキャリーバッグが必要となる。ここ20年ほどのキャリーバッグの進歩は目覚ましいから、今や私の周りには大小さまざまなキャリーバッグだらけとなり、用途に応じてそれを使い分けている。

日本にやってきたソノホにとって、まちがモノに溢れかえっている風景は想像できなかったはず。そんなソノホがリエと一緒に買い物に出かけた時、ふと目にとめたのがカバン店（というより、海外旅行用のキャリーバッグをあれこれと備えた高級ブランド店）にあった現金輸送車に積む銀色のジュラルミン製のような大きくて頑丈なキャリーバッグ。値段を見て少しビックリしたようで、衝動買いには至らなかったが、店を出た際の兄妹の会話を聞けば、ソノホがこれをかなり気に入っていたことは明らかだ。なぜ、ソノホはこんなものに目が・・・。これは、ソノホが7日間だけ日本に滞在した中で1つのエピソードとして描かれるが、本作のラストにはこのキャリーバッグが登場するから、それに注目！

ソノホがわずか7日間の滞在で再び北朝鮮へ帰らなければならなくなったのは一体なぜ？リエにはそれは全く理解できなかったが、そんな国で行動が不自由なソノホに対して、ニッポン国に住むリエはどんな行動も自由。現にヤン・ヨンヒ監督は1997年にアメリカに渡り、約6年間いろいろなことを学んだ人だ。しかして、本作ラストには、おそらく大枚をはたいて購入したと思われるこのキャリーバッグを引いて空港を歩くリエの姿が登場する。さて、このラストシーンが意味するものは・・・？

2012（平成24）年5月19日記